

## 就任のご挨拶

林産試験場長 松本 和茂

4月1日付けで林産試験場長に就任しました松本です。よろしくお願いたします。

私は平成5年に林産試験場に採用されて以来、32年間研究職員として現場で働いてまいりました。ここ暫くは林産試験場の場長には行政職の方々が就いていましたが、このたび私が研究職として場長に就任することとなりました。

研究職を場長に据えることの狙いは、何よりも研究マネジメントの強化にあります。平たく言えば、研究計画や実施体制などの具体的な研究内容をより専門的な視点から精査することで、取り組みの目的や目標に対して最短で結果が得られるように、また、得られる研究成果をより実用的な、直ぐに役に立つものとなるように導いていくことだと考えています。

また一方、道庁の林務行政に対して林産試験場の果たす役割は、林産試験場が地方独立行政法人に移行する前と何ら変わることはなく、林務施策の推進にあたり試験研究機関として科学的な根拠に基づく正確・公正な判断や分析を行い、それらに基づく提案や施策の実践を担っていくことにあります。そういった行政との密接な連携を図る上で、行政職の場長には大きな利点があったわけですが、その点を補うべく今年度から新たに行政職のポストとして副場長を設けています。このたび副場長に就任する山崎康裕氏は、前任地の渡島総合振興局東部森林室で室長を務めており、これまでに水産林務部の林業木材課や総務課などを経てきた林務行政のエキスパートです。これからは副場長とがっちりタッグを組んで隙のない組織運営を行ってまいりたいと思います。

私のこれまでの林産試験場での仕事について少し紹介させていただきます。採用以来、途中で企画部門を挟みながらも、ほぼ一貫して木材・木質材料の強度に関する業務に従事してきました。私が入庁した頃の1990年代は、北海道ではまだ天然林からの出材もあった時代で、人工林に関しては間伐材の用途開発が叫ばれていた時代でした。中小径間伐材の利用先として針葉樹構造用集成材の製造工場が道内各地に建設されたのもこの頃です。こうした集成材等のエンジニアードウッドの製造工程における技術的課題への対応や、強度性能向上に向けた技術開発等に取り組んできました。その後、人工林資源が充実し主伐期を迎えると、伐ったら植える持続可能な循環利用が求められるようになり、材を利用する視点から見て、いま山にある人工林資源がどんな材質のものなのか、産地や樹齢や施業履歴などとの関係性を考えるようになりました。この時に、木材を単に材料として捉えるだけでなく、森林資源とそれを伐って使う木材関連産業の結びつき、植えて育てて伐って使うという大きな流れを意識することができたのは非常に大きな収穫だったと感じています。この間、道内各地の森林組合や製材・集成材企業の方々からは本当に多くのことを教わってきましたし、それが今の自分の仕事の基礎となっていると自負しています。

道総研の小高理事長は、新年度の4月5日付けの北海道新聞に掲載されたインタビュー記事の中で、次の5年間の中期計画では、構造的な変化に直面する中、自治体などの政策当局や事業者に判断材料を提供する研究に力を入れるとし、バックキャスト、つまり目標とする未来の姿を基に今すべきことを考える上で科学的根拠に基づく情報が重要であると述べています。これらを実践していくために我々に求められることは、まずは道内の林業・木材産業の現状をいかに正確に認識・分析できているかだと思います。そのために、フットワークを良くしてできる限り現場を訪れ、生の声を聞き、業界の現状把握に努めたいと思います。また、それが林産試験場の基本姿勢となるように尽力してまいりますので、皆様方の一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます、ご挨拶といたします。

